

# 日本山岳会創立90周年記念ブロック別式典 華やかに開催

日本山岳会の90周年を祝う記念式典の第一陣として、6月・九州ブロック、ついで7月に岐阜・京都ブロックで開催された。各ブロックはそれぞれ趣向を凝らした講演や山行を企画し、楽しい集いとなっている。



滋賀県多賀町の会場・アストロパークで挨拶する村木潤次郎会長

七月八、九日、岐阜・京都支部合同で創立九十周年記念行事を行った。八月(土)午後、あいにくの雨の中を、滋賀県多賀町のアストロパーク天究館に、両支部所属の会員を中心とし、首都圏や東九州の方々を合わせ約百十名が参加した。

記念式典は午後四時、東京から駆け付けてこられた村木潤次郎会長の挨拶で始まった。会長は現在日本山岳会が取り組んでいる問題として、会員の年齢構成が上がっていること、尖鋭的な登山と安全な登山を両立・調和させること、自然保護がますます重要になっていることなどを話された。

ついで、高木崎男岐阜支部長は、二十八年前岐阜大学長に就任された今西

錦司元会長に呼び出され、岐阜支部創設の仕事に携わった当時のエピソードを、斎藤惇生京都支部長は、同じく京都支部創設を推進された今西先生が、陰謀をたくらむ集団たれと徹を飛ばしておられたことを、いずれもユーモアたっぷりに語った。

記念講演は京都大学名誉教授伊谷純一郎氏による「今西錦司先生との山行・サル研究をめぐって」である。京大動物学教室の師弟の関係にあったお二人は、一九四八年に始まるニホンザル研究、一九五八年からのアフリカの類人猿・人類学研究をいっしょにやってこられた。戦後の食糧難時代に南九州の山々を登ってまわったときの苦労話と失敗談、アフリカのメルーやルーウ



1995年(平成7年)  
9月号(No.604)

社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価一部 150 円

## 目次

日本山岳会創立90周年記念ブロック別式典華やかに開催

岐阜・京都ブロックの行事…… 1  
九州ブロック式典と平治岳山行 2  
追悼・橋本誠二さん…… 3  
山と医療…… 3  
報告

第19回若葉会山行…… 4  
スキー力学講演会…… 4  
今井喜美子さんを囲む会…… 5  
第6回写真撮影会…… 5  
支部だより…… 6  
秋田、山形、信濃、岐阜  
図書紹介…… 8  
『有峰物語』『地図の遊び方』『これなら安心・山歩き入門』『東西登山史考』  
書籍受入報告・新入会員…… 9  
創立90周年記念事業募金応募状況 9  
東西南北  
近藤茂吉氏、三枝守博氏の葉書10  
遥かなるマウント・シャクサン10  
詩・におい…… 11  
自然保護随想…… 11  
短歌・鳥海山・夏…… 12  
海外の山…… 12  
会務報告…… 13  
ルーム日誌…… 14  
INFORMATION …… 15

▶日本山岳会事務取扱時間  
月・火・木・土曜日 10～20時  
水・金曜日 13～20時  
▶図書室開室時間  
日曜・祭日・月曜日を除く毎日  
13～20時

エンゾリ登山の思い出など、スライド写真をまじえて一時間にわたってお話になった。大リーダー今西さんの面目躍如たるところを伝え、また講演者伊谷さんの誠実で暖かいお人柄がしのばれる、大変よい講演であった。

午後七時から天究館別館に移り、懇親会がビュッフェスタイルで開かれた。ホテルから出張の練達の料理人たちが腕によりをかけた和洋中華のご馳走と、あり余るほどいただいた大量の飲み物があつて、楽しいパーティーになった。ただ一つ心残りなのは、予定されていた六〇センチ望遠鏡による観望が、降りしきる雨のため流れたことであつた。夜は天究館と、約一キロ離れた多賀

## 九州ブロック・式典と平治岳山行

記念式典は六月十七日午後二時から、大分市コンパルホテルで開催された。中村純二副会長の日本山岳会の歴史紹介、九州ブロック代表吉村健児福岡支部長の「会員一人ひとりが山岳会をもち立てよう」、開催地東九州・梅木秀徳支部長の「遠路を参加くださった皆様に感謝」の言葉で始まりました。続いて重廣恒夫登山隊長の「マカルー登山報告」です。壇上に立った姿は、日焼けした顔に蓄えた髭、登頂日の遅

町林業会館の二か所に分宿した。

九日(日)、約二十名は湖東町にある「西堀榮三郎記念探検の殿堂」博物館の見学に出かけた。他の約七十名は鈴鹿山脈の最高峰御池岳(一二四七メートル)に登った。雨はあがり、鞍掛峠トンネルの三重県側に十数両の車を駐車、九時に歩きはじめる。登るにつれて雲は上昇し、天気はよくなった。正午には照りつける陽光のもと、頂上での満ち足りた憩いのひとときを過ごすことができた。

本部および全国各地から参加された皆様にお礼を申し上げ、準備に奔走された委員各位の労苦に感謝して、報告する次第です。(京都支部・酒井敏明)

## 今年もさよならで会いましょう

中村純二副会長の講演「登山の夢」は百四十枚のスライドを使って、奥様との山行をお話になりました。「誰もが体力、気力、知力を頼りに、行きたところへと思っています」。今まさに中高年者の登山ブームには目をみはるばかりです。お二人は、自分で計画すること、バック旅行にはない他との触れ合い、楽しみを得ています。しかし危険も山もります。熊の足跡、雪の中のツェルトと、雪山を中心に写し出される様は「いつ家にいるのですか」と問いたくなるほど日本列島を自由に移動する姿でした。「衣食住を持ちカタツムリのような生きざまは、他のスポーツにはないもので、厳しい自然のご機嫌伺いをしながら計画し、行動する、そして成功すれば次々と夢はふくらみ、楽しさの積み重ねとなります。健康な心身で登山を実行することこそ最大のご馳走です」とスペイン出発を目前のお忙しい間を縫っての講演です。

九時半まで続き、岐阜・高木崎男支部長の歌、中川氏のダンスが目立った楽しいひとときでした。

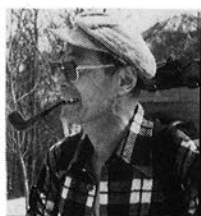
翌十八日、灰色の空、雨の中をバス一台と自家用車で、男池登山口へ。ガスでも見えない九重高原、小雨混じりのなか、一人百円の入山料を払い男池へ。暗く緑の美しい原生林も、九重山系ではここが一番です。コースもよくみがかれ、黒い土と岩、根っこを気にしながら、ミヤマキリシマの間を進みます。蕾、満開とピンクの花は盛りでした。

雨は止みましたが風が強く、山頂では寒さも心地好く感じられました。視界がきかないので遠望できないのが残念でしたが、人も少なく、コースもスムーズに歩きました。東京へ帰る中川氏は加藤英彦支部員の案内で先に下り、私は中村夫妻と長者原へ。山一面ピンクの様を見せたかった願いがかない、一瞬雲間からピンクの衣をまとった平治岳が見えました。皆が下ってきたのは午後五時、坊がつるから平治岳が望め、カメラに収めたそうです。

参加者六十四名が一人ずつ自己紹介。このときとばかり本部の小倉茂暉、中川武、吉永英明氏らに聞いていただこうと、短い中に熱のこもった自己アピールをしていました。飲み、語り、と

二日後、岐阜支部長より「あの山は日本の宝です」とのお葉書をいただきました。(東九州支部・西孝子)

## 追悼・橋本誠二さん



朝比奈英三

橋本誠二君が亡くなった。それは私たち北大山岳部OBにとって、戦後最大の星を失った想いであった。

彼が北大に入学し山岳部に入った一九三六年、私たちの交友は始まった。入学前から優秀な部員として期待されていた彼は、その恬淡な人柄と相まって、私たち上級生の間でも「ヤンチョ」のあだ名で親しまれた。

私たちが山行を共にしたのは、一九三六年末十勝大雪縦走に向かったのが最初である。この時は初めからひどい天候で、森林限界に張った天幕がまる二日続いた暴風雪で雪中に全く埋没し、三日目によりやく十勝岳吹上温泉に引き返した。これ以来幾度か行を共にしたが、二人だけの山となると、不思議なほど天候に恵まれなかった。その最たるものが、一九四一年三月の日高の山行であった。この時は二人とも、その前年のペテガリ隊遭難の弔い合戦の気分、前隊とほとんど同じルートを使って、コイカクからペテガリまでの山稜を往復する予定であった。しかし

入山十二日間に晴れたのは二日だけで、辛うじて到達したルベツネ山頂は、体も舞い上がりそうな烈風の中であった。凍った稜線に伏したまま、私たちはペテガリまでわずかの距離に迫りながら引き返す無念さに歯がみした。この山行は彼にとつては数多い日高山行の一つにすぎなかったが、私には全力をあげて戦った山としては最後であった。

卒業後は二人とも北大に残ったので、以来半世紀を超える親交を重ねたが、この間彼は地質学の教授として日高山脈の地質構造などに関する著名な業績をあげ、また困難な時期に教養学部長として北大の運営に参画した。

一方山登りのほうは、自らリーダーとなつて数々の記録的登山を行い、北大山岳部のレベルの回復に最大の貢献をしたのであった。

JACには二人とも一九四一年に入会したが、彼は一九五五年マナスル遠征の先遣隊としてネパールヒマラヤの地質調査を行い、一九七五年から四年間、評議員も勤めている。一九七一年には北大山の会の多くの協力者を得て自然と登山の総合書『日高山脈』を著した。また一九七四年には Geology of Nepal Himalaya の出版により十六名の共著者とともに秩父宮記念学術賞を受賞した。JAC北海道支部では、一九八四年より六年間支部長を勤め、

一九九二年十二月にはJAC名誉会員に推挙された。

一九九三年二月、二人でJACの山岳史懇談会に北大山岳部の話をすることなり、久しぶりにそろって上京した。この時は、会の直前に望月達夫氏と久闊を叙する余裕があり、また懇談会も大勢の古い山友に会える大盛會であった。しかし地下鉄の階段では、彼

がかならず手すりに沿って下るのを見て、かつては山スキーの名手であり、七十歳を過ぎても若い後輩に伍して日高山行をこなしていた彼が、バランスに自信を失ってきたことを知り、不吉な予感におののいたのであった。二年後、それは現実のものとなり、我々の敬愛する「ヤンチョ」は思い出の人となつてしまった。

## 山と医療

## 杖について歩こう

大森薫雄

山岳会の中には年配の方がたくさんいらっしゃるにお見受けするし、この会の平均年齢がかなり高いと見なければなりません。

かつて、紳士たる者の象徴の一つとして、ステッキがありました。ステッキとは杖のことです。ところが急速な自動車文明社会の発展とともに、紳士方はステッキの代わりにハンドルを握り、杖は紳士の象徴としてではなく、足腰の弱いお年寄りや身体障害者の専売特許となった感があります。別にそれが悪いというわけではありません。文化、文明の発展とともに、物に対する考えが変わってくるのはやむを得ないことで、杖に対する考え方も一つであったのでしょう。

昔に比べると、人間はずいぶん長生きするようになりましたが、新たな悩みも生じてきました。それが足腰の衰えです。これに対処するために、杖をつくようになりました。杖をつくこと

で、弱った足腰の負担を少しでも軽くし、つまずいて転倒することを防ごうとしています。昔のようなステイタスとしての意味合いは、ほとんどなくなったというわけです。もっぱら実用性を中心に考えられるようになったのが現状でしょう。

ところで私たちは、微妙なバランスを腰の一点で保ちながら2本の足で歩いています。これが腰に大変負担をかけているのです。そこで私たちは、登山の際、痛む足腰の側に杖を持てば、腕力で腰の負担を軽くすることができます。また、杖をついて歩くことは、両足の負担を軽くし、疲れる度合いを遅らせてくれます。疲労のため、それこそ足が棒のようになったときでも、杖をつくことによって歩くことが可能となります。足腰に少々不安のある人なら、ぜひとも杖を使っていたきたいものです。

私は常々歩くこと、山登りは賢者のスポーツであるとの信念をもって皆さんにお勧めしています。その上、「1本の杖による健康作り」をぜひ山岳会の皆さんに実践していただき、積極的に楽しい毎日を過ごしていただきたいものと思っています。

## 報 告

## REPORT

## 第十九回若葉会山行

## 栗ヶ岳・守門岳登山

## 集会委員会

若葉会山行もすでに十九回を数えるという。念願の守門岳に登れるとあって初めて参加したが、片岡さんや地元の方々、また集会委員の皆さんの心遣いのお陰で楽しい山登りを満喫することができた。

二台のバスに分乗した一行約五十名が下田村自然教育センターに到着したのは六月十日の早朝。地元の松本英一会員から案内をしてくださる地元山岳会の方々の紹介を受けて登山にとりかかった。梅雨の最中にしては申し分のない空模様で、目指す栗ヶ岳が往く手に端整な姿を見せていた。栗ヶ岳は一二九三メートル、登山口の標高が約一〇〇メートルだから相当なアルバイトを覚悟する。

田園地帯を抜けて灌漑用水路のほとりをししばらく気分よく歩くと、やがて八汐尾根の急登となる。越後の山はまだ初夏の気配である。ドウダンツツジの蕾は幼く、タムシバの白が若緑の中

に鮮やかだった。視界が開けると守門岳が遠く望まれた。雪を残してなかなか立派である。いいかげん汗をかいたころ、五合目栗葉師に着く。栗葉師と避難小屋があつて、休むに具合のよい平地である。ここで大休止をとる。

天気が少し怪しくなってきた。時々パラパラと降ってくるが気にするほどのこともなく、なおも続く急な登りに高度を稼いで八合目を過ぎると、尾根路はしばらく緩くなる。このあたり一〇〇〇メートル程度の標高ながら二〇〇〇メートル級の高山の趣が感じられる。開発されている様子もほとんどなく、いかにも奥行き深い山である。やがて灌木と笹藪の密生した斜面に取りつき急坂をひと頑張りすると、二等三角点のある頂上だった。あいにく視界が悪く展望はなかったが、十分に満足できた。

一時間余りの滞在の後、下山にかかる。下の祓川の河原まで下りると、山菜採りの別行動組が、クジラ鍋とビールを冷やして待っていてくれた。

夜は宿舎の教育センター前の広場で豪勢な火を焚き、豊富な山菜料理を囲

んで、銘酒「守門岳」や「栗ヶ岳」を堪能した。

翌十一日は高曇りで明けた。宿舎から守門岳の登山口の守門村二分まではバスで一時間ほどかかる。そこからマイクロバスに分乗し、標高約七五〇メートルの保久礼小屋近くまで運んでもらう。小屋はコンクリート製のがっしりした避難小屋で、水も豊富に流れている。ここが午前七時、登りはいきなり階段の急登が始まった。宿酔気味の身体には少々きつかったが、一時間余りたつぷりと汗を流して気分が乗り出したころ、樹林帯を抜け出して広々とした尾根に出た。見えるのは越後駒や平ヶ岳あたりか、燧ヶ岳もそれと指呼できた。そこからはわずかな登りで、一四三二メートルの守門大岳。名の通り広い山頂で、まだ豊富に雪が残っていた。ここで参加者のほとんどが集結して大休止。目の前に雪を残した守門岳本峰の眺めが素晴らしい。大岳からはいったん一五〇メートルほど急降下し、残雪を踏んで登り直したところが青雲岳。池塘が散在するなかなか気分のよい高原状の山である。時期がくれば花々が咲き乱れることだろう。このころにはガスが立ちこめ、視界が限られてきた。青雲岳からは二十分ほどの登りで守門最高峰の袴岳一五三八メートルである。時間はちょうど十時、三時間を要したことになる。

二等三角点のある山頂には、信仰登山の名残の石祠がいくつかまつられていた。湧き立つ霧にあいにく展望は得られなかったが、念願の山頂に立てて満足この上なかった。

帰りの時間に制約があつて、ゆっくり滞在することがかなわず、簡単に腹ごしらえをしようと、すぐに元の路を下りにかかる。大岳への登り返しに息を切らし、後は一気に保久礼小屋まで駆け下りた。降り着いて汗だくで飲んだ水はビールよりも旨かった。

帰途、温泉で汗を流し、ウドやウワバミソウなどの山菜をたくさん土産に抱えて、収穫の多い山行を無事、楽しく終えることができたのは、お世話くださった方々のご苦労があったればこそで、改めて感謝申し上げたい。また、これからも魅力ある計画を立てられて、若葉山行が年々盛んになることを祈念している。(石橋正美)

## スキー力学講演会

## スキーロボット実演による

## シミュレーション

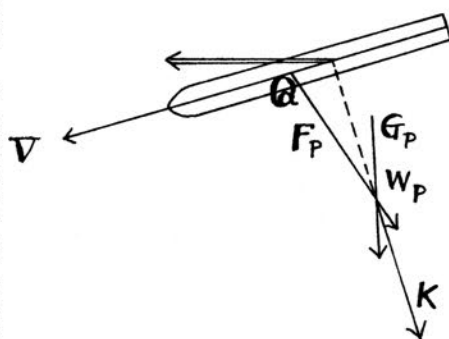
## 科学委員会

尾原味夫氏による標記の講演が去る七月七日、本会ルームで行われた。本会がスキーに関心を持つのは当然『山



スキー』に関してであるが、これは現在著しい発展の過程の中にあり、当科学委員会が『山スキーと一般スキーの技術は別ものか? 同一か?』と題して、本会を代表するスキー技術の使い手を集めて集中講演会を行ってから、わずか十年余しか経過していない。

スキー力学のような基本問題に立ち返って考察するのもオフシーズンに意義あることと考えられる。



図はターンの初期である。雪の抵抗  $F_p$  の着点  $Q$  は雪の抵抗によって、たわむでスキーの中央より前にずれてくる。 $W_p$  はスキーヤーとスキーを併せた重力であり、 $F_p$  は雪の抵抗で、 $W_p$  と  $F_p$  との合力  $K$  は下側を向いた大きな力になる。 $K$  は進行方向  $V$  に対して直角な大きな成分を持っているから左回りの回転を起こさせる。右回転の場合は

反対の動作で行われる。

以上はスキー力学の創始者木下是雄氏の考えである。

本日の講演者、尾原氏は後傾による回転の考えを加えて、その実験を可能にするロボットを作った。それで得られた結果は

$$(F_1 - F_2) \cdot r = I \cdot \beta$$

ここに  $F_1, F_2$  : 前半及び後半の雪の抗

力

$r$  : 回旋軸の中心から雪の抗力の中心までの距離

$I$  : (スキーヤー) + (スキー) の慣性能率

$\beta$  : 角加速度

山スキーで問題になる靴は大きなテ

ーマであるが、登山靴のように軟らかい靴は雪を捕らえられない感じが強い。また悪コンディションに弱い。参加者三十五名。

(松丸秀夫)

## 今井喜美子さんを囲む会

### 山の生き字引!!

#### 二火会

六月十三日(火)、十八時三十分〜二十時、山岳会のルームで、今井さんを囲



お元気な今井喜美子さん(前列右から二人目)を囲んで

む会が開かれた。ひと言でいって有意義な会であったと思う。参加者二十五名。

「山があるから充実した人生を頑張れる」と、九十歳になられた今も若い仲間と山登りを楽しんでいる今井喜美子さん(明治三十八年生れ)。私たちはその今井さんから貴重なお話をたくさん伺うことができた。

小倉童子さんが上手に今井さんからお話を引き出され、夫君雄二様との出会いから、初めての山の思い出、初めてのスキーの思い出等々は尽きなかった。ユーモアを交えながらのひと言、

ひと言が、若い人たちには大変興味深かったと思うし、また私は、私なりにゲートルを巻いて地下足袋や草鞋で歩いた昔を、しきりと懐かしく思ったのだった。

一時間半という時間はあまりにも短かった。またお話しを伺う機会をぜひ持ちたい。彼女のような偉大な先駆者があつての私たちのだから。

「山の生き字引とはまさに彼女のことだ」とルームを出られる今井さんを見送った。

(熊谷とも子)

## 第六回写真撮影教室

### 高尾山での撮影・ハイキング

#### フィルムビデオ委員会

第六回写真撮影教室・ハイキングを七月二日、高尾山でアルパインフォトビデオクラブとの共催で行った。

曇天にもかかわらず、高尾山口駅前には二十一名の方々がカメラを携えて参集し、アジサイの咲く山道を山頂目指して登り始めた。草花やキノコの姿をカメラに収めながら城山まで足を延ばし、日影沢下のバス停には五時頃到着するといったのんびりしたハイキングだった。天気予報から雨を覚悟していたが、午後には薄日も射す幸運に恵まれ、楽しい一日を過ごすことができた。

(北村義男)

JAC  
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況を  
レポートします。

## 秋田支部

## 春の北林岳山行

秋田に北林岳(八二〇メートル)という山がある。「北林おばあちゃん」の古希に登ろう、それは残雪の頃、誕生日と重なりと最高だね。何年も前から常務委員の佐々木さんが計画していたが、ちようどその時には登れなかったが、今年ようやく実現した。

五月三日、一行十四名は早朝秋田を車で出発。すっきり晴れとはいかないが、登山にふさわしい天気予感がする。歌内林道の途中で左側の林道に入り、登り口を捜すこと三十分。十三時十分、杉林の中のアイコに目を注ぎながら登山開始。間もなくジグザグのけっこう急な登りになる。道端のキクザ

キイチリンソウ、カタクリが盛りだ。標高六〇〇メートルくらいでもシラネアオイが咲き誇っている。このあたりは雑木林の新緑。高度が増すごとに堅い蕾に変わっていくのがよく分かる。急斜面でも、北林さんはマイペースのしっかりした足どりで私とシンガリをつとめる。こうしたテンポは、周囲がよく見渡せるし、観察には最高である。それに北林さんは、豊富な植物の知識を惜しまずに披露してくれるのでありがたい。

雑木林の中の道は稜線近くまで続いているが、稜線下から藪こぎになる。分岐点には先発隊が目印を付けてくれているので分かりやすい。稜線へ出ると広い草原があると教えられたが、それは急斜面の小さなスキの原であった。そこから少し外れてすぐの頂上に十二時五十分着。三等三角点があり、最高地点はこのすぐ後方にある。五の宮、皮投方向はガスに包まれ、好天なら格好の展望台であったのに、残念だ。風が少し冷たい。北林おばあちゃんが無事に名前の山に登れたことに感謝し、今後ますます元気で山登りを続けられることを祈って乾杯した。それから遅い昼食、記念撮影とセレモニーを終え、十四時下山開始。下るのがもったいないようなカタクリの花街道を十分に堪能し、さらに下ではアイコを

探り、十五時十五分車に着く。

\*

秋田支部は何時から一旦二座登頂になったのだろうか？ 今日また二つの山、三哲山(三九四メートル、三等三角点)に登った。私には初めて目にするところだが、ここは医は仁術、三哲を偲ぶ山だった。

私たちは中腹の神社のところまで車で上がり、そこから歩いた。アカマツとミズナラの混生林の新緑にタムシバの白さが目につく中、タラの芽を摘みながら登った。頂上から眺めた鹿角盆地には夕闇が迫っており、この山に込められた村人たちの願いに思いが募った。(福田光子)

## 山形支部

## 神室連峰・八森山

五月十三日の支部総会記念登山の八森山は、終始霧雨の煙る白い世界だった。ここは新庄神室連峰の最南端のピーク。一〇〇〇メートルそこそこの山とはいえ、いかにも陸奥らしい深さと静けさに満ちている。

周辺は山菜の宝庫であり、その最盛期を狙ってか、林道の所々に車が止まっている。薬師原の登山口に至り、菅原富喜氏の先導で雨具を着けて登りにかかる。初めは杉林のなかにカタクリの

乱れ咲く薄暗い藪を分け、次はいきなり急勾配が続く。菅原リーダーはなれて山とて急坂も平然。その速さにハアハアしながら登る。苦しくなる、タムシバの純白の花が露をふりまきながら揺れている下で足を休める。イワウチワが点々と径を彩り、頑張れよ、と励ましてくれるかのようだ。

しばらく進むと残雪が現れ、藪と雪を交互に踏んでゆく。と、ブナの倒木にブナワカエの群生を見つけた。帰路の楽しみに採らずにおく。次第に風雨が強まり、気温も下がる。笹藪がガツパリと径を覆い、前をゆく仲間の頭しか見えない。晴れていれば神室連峰が一望に見渡せるのだがと、リーダーはガスで見えないあたりを指さす。

風にたたかれ、震えながら、人影とてない山頂に到達、十一時。展望は全くないが、最上の山並みの広やかさがヒタヒタと我々を包んでいるのを感じた。祠の陰で食べた誰かが持参した「トチモチ」のうまかったこと。さて、寒い頂上に別れを告げて下山にかかる。登りにつけておいたブナワカエの場所を目指して、疾風のように下る三人組がいた。なんと大ビニール袋に二袋もの収穫。いつの間にか風雨はやわらぎ、霧の動きにつれ、明えたばかり

の新緑の山林と残雪の絶妙の組み合わせが、現れては消え、息をのむほどの

鮮やかさだった。

後続もいっしょになり、コシアブラの若芽を採りながら、豊かな自然から体を揉みほぐされたような気分です。山麓の車の地点に戻った。(折原栄悦)

## 信濃支部

### 雨のウエストン祭

六月四日、上高地アルペンホテル。目覚めると雨が降っていた。参ったな。今日はウエストン祭だというのに先が思いやられる。夕べの前夜祭の酒が残る頭がさらに重くなる。

前の日、徳本峠を越えた参加者は、昼過ぎから雨に降られたという。越えたのは地元安曇村の小中学生百七十人を含む約四百人。なかには村木会長や八十一歳になる坂倉登喜子大先輩もおられる。年を経てもますます健脚なJACの先達には頭が下がる。

いくら待っても雨は止まない。降りしきる雨の中、テント張りや椅子の準備など碑前祭の準備をする。雨はユーウツだ。午前十時の開始時刻までの一時間ほど、碑の前の梓川の石積みにもたれ、ウォルター・ウエストンその人に想いを馳せる。

一八九一年の夏、彼は雨の中、槍ヶ岳を目指した。雨は止む素振りも見せず激しくなるばかりだ。それでも彼は

行動を止めず、夕方案内人が止めるのも聞かず頂上を目指す。もちろんルートは定かでなく、登った者はほとんどいない。雨、迫る夕闇、空腹、疲労、悪条件にもかかわらず彼を立ち向かわせたのは一体何だったのだろう。パイオニア精神だといえればそれまでだが、自分は果たしてそんな状況の中で彼のように頂を目指すことができるだろうか。結局この時彼は登れなかったが、止む気配もない雨にうたれながら、彼の偉大さに改めて脱帽する。それに比べて今日の雨など何だというのだ。定刻に祭りは始まる。支部長挨拶、献花、献歌、黙禱。続いて挨拶に立った村木会長は「ウエストン祭は来年五十回を迎える。さらにその五十年後、つまり百回目のウエストン祭の時には山々の緑が今のままのようであり、上高地が同じ姿であるかどうかは疑問が残る。その頃今日集まった我々の多くは存在していないだろうが、自然が今のままであり、楽しい登山ができることを祈る」と自然破壊への危惧を述べた。有馬安曇村長も「観光客のゴミのポイ捨てなどモラルが低下している。最盛期は上高地にのぼるだけで四時間かかってしまうため、河童橋で記念写真を撮るだけで、何も見ないで帰ってしまう人たちが多い。輸送システムや入山制限など上高地のあり方が今、問

われている」と厳しい指摘をする。

尾崎喜八の詩の朗読の後、岡澤祐吉氏が「アルプスとグリンデルワルト村」と題して、雨の中でたずむ子供たちにも分かる表現で、榎有恒のアイガー東山稜初登攀の際の村の人々との交流の様子などを記念講演として話してくださる。締めくくりに「今日の日はさようなら」の歌が響く頃、雨はようやく小降りになって薄日が射し、ヒガラがツッピーツッピとエイトビートの早いテンポで高らかにさえずり出す。ウエストンを縁に人々が毎年集い、巡り合い、語り合う。雨にうたれながらも彼を偲ぶ祭りはいいものだ。いつまでも山と上高地に豊かな自然が残る、ウエストン祭が五十年後も同じように開かれればいいと痛切に思う。そのためには我々は何をすべきなのか、そんな課題を投げかけた今年のウエストン祭だった。(植松晃岳)

## 岐阜支部

### 支部総会と桑崎山登山

四月十五、十六日に奥飛騨の神岡町で、本年度岐阜支部総会と春季懇親山行が、会員三十八名が参加して開催された。

はじめに高木崎男支部長から「現在会員は百五十二人(うち会友六十七人)

と多くなった。登山技術を常に心得て、

日本山岳会の会員にふさわしい会員であってほしい。平成七年度は日本山岳会創立九十周年にあたり、七月八、九日に、岐阜・京都ブロック記念式典を行うので、多数参加してほしい」と挨拶があった。次に、平成七年度事業計画など六議案を承認し、総会を終えた。翌十六日、春季懇親山行は、神岡町役場職員の大前さんら二名に案内していただき、総数四十人が参加して、山吹峠から桑崎山へ登った。

天気は、日本の南海上に前線があって、雲の出やすい空模様が続く。視界はあまり良好ではなかったが、全員が残雪を踏んで三時間余りをかけ、頂上へ登った。頂上は雪原で、所々に大きな針葉樹があり、視界は一〇メートルほどであった。

京都支部から参加された最年長の伊藤潤吉さん(八十三歳)の発声で「ヤッホー」を唱和した。そして、伊藤さんのように高齢になっても山登りが続けられるよう、「あやかりたい」と、多くの会員が伊藤さんと握手をかわしていた。

頂上は気温四、五度と手もかじかむほどに寒く、昼食もそこそこ切り上げて下山にかかり、十二時三十分、全員無事に山吹峠へ下り、散会した。

(清水芳彦)

## 図書紹介



カット 中村あや

飯田辰彦・著  
『有峰物語』

富山から雲の平や薬師岳に入るとき、バスの終点近くで有峰湖が湖面を輝かす。かつて、このダムの下には有峰の集落があった。本書は、離散した村人や近隣の古老たちを尋ね、山の民として生きてきた有峰の歴史を丹念に描き出す。小説『天の夕顔』で、主人公が「この世から最も遠いところ」として向かったのがこの有峰であるという。また平家の落人の村であるという言い伝えもある。著者は、古い伝承や江戸時代からの戸数の変化までもていねいに掘り起こす。

ところで、山村の歴史をたどる場合、近代登山との関わりに触れざるを得ない。有峰の場合も、古来、宗教の山であった薬師岳が、近代登山の対象になっていく。著者は言う。「日本の近代登山の幕が開いた」が、そこに「山里

の悲劇は絡んでこなかった」「ほんの一端にでもいいから、忘れられゆく山住みの日本人に対するなにがしかの言及、また最低限の関心というものを示してほしかった」。ウエストンや深田久弥についても、「山の民」に対する配慮の足りなさを指摘し、手厳しい。それにしても戦後の経済構造の激変の中、日本中にいったい幾つの「有峰」の物語があるのだろうか。

一九九五年三月 NTT出版発行  
二二七ページ 千九百円  
図書室未蔵書 (三好まき子)

今尾恵介・著  
『地図の遊び方』

今まで地形図を扱った地図の本といえば、堀諄一さんに代表される紀行ものか、記号の読図を中心としたクイズものが多かった。遊びと銘打った場合でも、それは例外ではなかったように思える。そういう観点からしても、この本は、やはりユニークである。

一言で言えば、徹底して個人地図趣味的な本だといえよう。図幅のほとんどが海という地図を集めて喜ぶ「おタク」ぶりが冒頭から登場する。それを著者自身が自認しているのであるからそこにこそこの本の真骨頂があるといえる。

もっとも、おタクぶりといっても、決して閉鎖的な関心にとどまらない。そこは現実とつながる地図の世界である。日本の地形図が、記号に関して、海外のものに比べ役所記号が圧倒的に多いことを指摘してみたり、観光企業の自社本位の地図づくりにも目配りし、ハッとさせられる部分もある。しかも、それが手書き地図の制作者という職業的な手腕を生かし、実証的に提示されているところに説得力がある。とはいえ、それも遊びの一環であることに変わりはない。そうした職業的制約からか、あるいは個人的な趣味の問題からか、山に関する記述がほとんどない。そういう意味でも地図の本としてはむしろユニークといえるのだろう。

一九九四年八月 けやき出版発行  
二二〇ページ 千四百円(山口裕二)

## 小倉童子・著

## 『いれなら安心・山歩き入門』

「未知への挑戦」をモットーとする小倉童子さんが、五十年間の登山と山歩きで体得した知恵と山歩きの楽しみ方を伝えることができればと、表題の本を上梓した。

●さあ、山へ行こう! (準備編) : : では地図や計画について ●いざ、山歩きの日(実践編) : : では山歩きの心

得を ●これでバッチリ! 山の準備 : : では靴や服装の準備などに続いて ●危険の予防と対策 ●安心のための健康チェック : : について述べ ●山の楽しみとこだわり : : では山の楽しさを広げるための食事、山菜、温泉、さらには森林の生態学、高山植物、バードウォッチングに至るまで、山登りのために必要なエキスがすべて含まれている。

初心者には大変親切で分かりやすく、随所にイラストやマンガが挿入され、読んで見て楽しく、コラム欄では山登りにおける問題点も説かれている。長年にわたる文部省登山研修所委員としての経験から、安全登山の基本と山歩きの楽しみ方が網羅されている。初心者向けのテキストとして、これ一冊あればという適書である。

一九九五年五月 主婦と生活社発行  
A5判 一六〇ページ 千四百円 (細井澄子)

## 田口二郎・著

## 『東西登山史考』

本書は、仕事柄ヨーロッパ滞在に豊富な経験を有し、またアルプスやヒマラヤ登山史に足跡を残した著者ならではの同時代的な比較文化史論である。二部構成からなる。第一部は、志賀重昂がガルトンから、小島烏水がラス



キンからそれぞれ近代的自然観を学び、ウエストンの知己を得て、日本最初の近代的登山団体「日本山岳会」が設立され、いわゆる日本の深山幽谷探検時代が展開されるわけだが、そうした明治期の登山の特性から始まって、榎恒・松方三郎らに代表される大正期のヨーロッパアルプス登攀とアルピニズムの嵐のごとき到来など、日本におけるアルピニズムの展開を分かりやすく論ずる。そして、西欧のスイス・アルプス探検時代や、日本より先立つこと半世紀の英国山岳会ほかの組織化された登山界、などとの対比を試みながらヨーロッパ登山史をひもとき、加えてアルプスからヒマラヤへと変遷する現代登山の流れまでも追う。

第二部では、榎恒、松方三郎そして今西錦司という、日本を代表する岳人三人の山の世界にスポットを当てる。それぞれの個性的な山岳観や登山思想の違いが巧みに描き出されていて、大変興味深い。なお、第二部を先に読んでからという読み方もあることを付記しておこう。

本会創立九十周年の年にふさわしい格好の一書であり、会員諸氏にぜひとも一読をお勧めしたい。

一九九五年五月 岩波書店発行 文庫変型判 二六四ページ 九百五十円

(小川益男)

## 書籍受入報告 (1995年7月)

| 著者                  | 書名                                                                                                               | ページ・大きさ      | 出版元               | 出版年  | 寄贈/購入   |
|---------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|-------------------|------|---------|
| 岐阜大学学術登山隊(編)        | 麒麟峰(Chiring) 初登頂: 中国・カラコルムの秘峰に初めての足跡                                                                             | 135pp/29cm   | 東京新聞出版局           | 1995 | 出版社寄贈   |
| 日本山岳会自然保護専門委員会(編)   | 「山の自然学現地講座」参加者レポート集(1993.11-1995.1) No. 1                                                                        | 201pp/30cm   | 日本山岳会自然保護専門委員会    | 1995 | 発行者寄贈   |
| G. レビュファ (著) 近藤等(訳) | 山こそ我が世界: La Montagne est Mon Domaine                                                                             | 277pp/20cm   | 山と溪谷社             | 1995 | 訳者寄贈    |
| G. レビュファ (著) 近藤等(訳) | 山こそ我が世界: La Montagne est Mon Domaine                                                                             | 277pp/20cm   | 山と溪谷社             | 1995 | 出版社寄贈   |
| 追悼集編集委員会(編)         | 芦峯の自然児・トンコ: 佐伯富男追悼集                                                                                              | 363pp/20cm   | 講談社出版サービスセンター     | 1995 | 藤平正夫氏寄贈 |
| 日本環境協会(編)           | 環境NGO総覧(平成7年・上巻): 全国民間環境保全活動団体の概要                                                                                | 656pp/30cm   | 日本環境協会            | 1995 | 発行者寄贈   |
| 日本環境協会(編)           | 環境NGO総覧(平成7年・下巻): 全国民間環境保全活動団体の概要                                                                                | 589pp/30cm   | 日本環境協会            | 1995 | 発行者寄贈   |
| 牧潤一                 | 牧潤一・山岳画集(白樺高原美術館収蔵): 8000m峰14座を中心として                                                                             | 55pp/21×30cm | ルミエール             | 1995 | 出版社寄贈   |
| 神奈川ヒマヤンクラブ(編)       | パキスタン北部バミールの3つの峠: 1994年踏査報告書                                                                                     | 72pp/26cm    | 神奈川ヒマヤンクラブ        | 1995 | 発行者寄贈   |
| 藤田健次郎               | ふたりの夏山: 夫婦で歩いた日本の高山ベストテン                                                                                         | 237pp/19cm   | 山と溪谷社             | 1995 | 出版社寄贈   |
| 外山紀郎(編)             | 天神崎の自然を大切に作る運動20周年通史                                                                                             | 224pp/22cm   | 天神崎の自然を大切に作る会     | 1995 | 発行者寄贈   |
| 宇土巻子(著) 藤門弘(写真)     | 田園の食卓: アリスファームのレシピから                                                                                             | 191pp/26cm   | 山と溪谷社             | 1995 | 出版社寄贈   |
| 玲峰グループ(編)           | 玲峰(Vol. 65): 銀谷國衛追悼                                                                                              | 120pp/26cm   | 玲峰グループ            | 1995 | 発行者寄贈   |
| R. A. McDonald      | Rock Climbing in Oman                                                                                            | 167pp/22cm   | Apex Publishing   | 1993 | 購入      |
| Martin Moran        | Alps 4000: 75 Peaks in 52 Days                                                                                   | 288pp/25cm   | David & Charles   | 1994 | 購入      |
| Dermot Somers       | At the Rising of the Moon: Short Stories by Dermot Somers                                                        | 208pp/23cm   | Baton Wicks       | 1994 | 購入      |
| Jim Haberl          | K2: Dreams and Reality                                                                                           | 110pp/26cm   | Tantalus          | 1994 | 購入      |
| Orrin H. Bonney     | The Grand Controversy: The Pioneer Climbs in the Teton Range and the Controversial 1st Ascent of the Grand Teton | 457pp/23cm   | The AAC Press     | 1992 | 購入      |
| S. Lightner Jr.     | Exotic Rock: The Travel Guide for Rock Climbers                                                                  | 165pp/22cm   | Sam Lightner, Jr. | 1994 | 購入      |

## 創立90周年記念事業募金応募状況 (8月8日現在) 累計 1,454人 3,903口 19,514,603円

## ●10口(50,000円)

加治甚吾

## ●4口(20,000円)

遠藤登(計8口) 石橋正美

## ●3口(15,000円)

渡辺勝彦(計5口)

## ●2口(10,000円)

友野正雄 吉田恒子 井後幸太

郎 牧野良三(計6口) 増淵

照治 清水正己 久保毅 宮崎

稔 牧潤一 糸原学 佐藤清衛

小川九三雄 浅輪幸久 副島勝

人 寒河江誠 藤井信 小栗宏

織田沢美知子(計4口) 北村

猛 藤井茂雄 井谷孝 太田晃

介

## ●1口(5,000円)

花澤廣巳 中園喜一郎 野萩守

岡田茂久 近藤薫 高田誠 平

田眞士 兼森志郎 木之下繁

宮本紀美代 泉有輝信 深谷泰

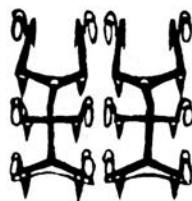
金澤敏彦 金澤静子 白木貞次

近藤有慶 石黒恒(計3口)

近藤緑

# 東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜七枚以内でお願いします)



カット 中村あや

## 近藤茂吉氏、三枝守博氏の葉書

望月達夫

草創期の会員がご存命中に、できるだけ古い時代の登山の思い出などを執筆していただきたい、というのが『山岳』編集者としての私の切なる希望でありまた主要な目的の一つでもあった。しかし残念ながら種々の理由でそれは不成功に終わったものが多い。

○昭和三十八年二月十四日、近藤茂吉氏から札幌市の望月へ、葉書

拝復 本月四日附の貴翰拝見いたしました。御厚意の程篤く御礼申し上げます。老生四年前より右眼失明し左眼も白内障にて筆執る事甚だ難儀の上過去の登山記録類戦災にて焼失せし次第故「山岳」への寄稿の件は是非御宥願います。北海道にて「山岳」御編集の

御苦労御察し申し上げます。今後共引き続き御尽力の程御願ひ申し上げます。返事遅れまして失礼御ゆるし下さい 勿々

○昭和三十八年九月十九日消印、三枝守博氏から武蔵野市境の望月へ、葉書

御書面頂きながら御返事延引申訳ありません。先月末頃より健康を害し居り目下静養致して居ります。御申越の件只今は何とも御返事出来かねますが幸に健康になりましたら又改めて御返事申し上げます。尚写真は原板が会の事務所にあったため大正十二年に横浜で焼失致しました。多少自宅にありましたものも疎開致す時東京に残しましたためこれも全部失いました。

(後年三枝氏は健康を取り戻され図書委員会が計画した「山岳史懇談会」の第一回昭和四十八年三月二十九日

に出席され、いわゆる日本アルプス探検時代の貴重な足跡について講演された。詳細は同氏の追悼が収載されている「山岳」七〇年二五九頁以下を参照されたい)

## 遙かなるマウント・シャクサン

福岡支部・堤甚五郎

アメリカ・ワシントン州の北、カナダ寄りに悠然とそびえるマウント・シャクサン(二七八二メートル)は、ノースキセケード国立公園に属し、多くのクライマーの憧れの山である。その北東方約一・二キロメートルにある前衛峰ノクシャワク・タワー(五〇〇メートル)とともに、全米に有名である。

頂上から中腹までは万年雪に覆われ、カーチスガレッシュャー、ハンキング、ブライスなど数条の氷河を持ち、ことにブライス氷河はアイス・クライミングのメッカとして親しまれている。シヤクサンの西方、約一七キロメートルにあるマウント・ペーカー(三二八五メートル)を女性的と見るなら、シヤクサンは男性的雄峰として堂々とそびえている。その容姿に惹かれて、国内からはもちろん、カナダからの登山者もしばしば踏み跡を残している。ルー

トはペーカー・スキー場裏手から三時間でレーク・アンに、さらに七時間以上を費やして、ようやく頂上へ立つことが出来る。なかなか手強い、上級者向きの逸品と目されている。

以上は下関市出身のM・T君が、スキー場に着くまでの車中で聞かせてくれたものだが、彼はかつて、北九州のM山岳会に所属し、南米・アンデスのアコンカグアやヒマラヤへも足を踏み入れている。私の次女と結婚して以来、カナダのバンクーバーに居住してすでに二十年。当地のカナダ山岳会に在籍し、余暇を作っては精進を続け、シャクサンには四回登攀を試み、二回ほどは頂上を極めたようである。

さて私たちは、テンプル・マウンテンからシャクサンの偉容に接しようと、四月二十九日早朝出発。十一時過ぎ国境に着いたが、出国の車列に十五分以上も待たされ、ペーカーのスキー場駐車場に着いたのは十二時半過ぎ。ここで軽食を済ませるや、足ごしらえもすっかりと早速に出発。夏の踏み路から推して積雪は三〜五メートルはある、という娘の説明に驚きながら、それを踏みつけて登る。雪は意外と湿り気が多く、老いの足はとかく潜りがちで、娘と婿に前後を護られながらの一足、また一足であるだけに、テンプル・マウンテンはあくまでも遠く、随分と遙

かに思え、いわんやシャクサンは今や雲の中でさえる。

難行苦行を重ね、ようやく十五時に昼食をとったが、柳行李に詰めた弁当は美味しく、梅干の酸味が故国の山旅を思い出させてくれて嬉しい。箸を休ませて見渡すと、広大な雪原、壮大な斜面を前に、見るからに雄大なマウン・ト・シャクサンがそびえ、続くマウン・ト・ルース、トミホイ・ピーク、ボーダー・ピーク、国境を越えて、セラソセ山群をはじめカナダの山々が、いずれも雪を深々と被って見えた。パンクラーの市街から朝夕親しんでいたライオン・ピークの双峰が、遙かに見えようかと楽しんでいたが……雲の彼方らしく、見ることはかなわなかった。

## 詩

### におい

荒賀憲雄

川っぶちに  
いい飲屋をみつけたと  
古い山仲間をさそった  
夜

橋のたもととの闇のなかで  
なつかしいにおいに出会った

夕方

疲れきって天場にたどり着いたとき  
かならず嗅ぐ  
あのおい

野菜といくらかの肉の煮える  
米と

排泄物のけはいさえかすかに混った

清潔なシートと

換気や冷房のゆきとどいた

日々のくらしのなかで

わすれきってしまった

魂のにおい

いっぴきの獣になって

霧と這松のあいだ

空き腹を抱えてさまよっていたときの

鋭い嗅覚が

遠くからとらえていた

いのち

街の

夜の底のどこから

このにおいは生まれてきたのだろう

わからなかった

わからなかったが誰も

しばらく動こうとしなかった

## 自然保護随想

### マッキンリーのトイレ

大蔵喜福

設置されたゴミ箱と同様に、反対に責任回避の民度の低い登山者を増やすことになりかねないと思った。

高山での入山者の数を考えれば、マッキンリーは特異な存在である。

環境先進地アラスカならではの悩みだ。排泄物処理問題で国立公園局は、

いまのところクレバスへの廃棄よりいい案はないとしている。が「テイ

クイン・テイクアウト」を厳密に守るならば、登山者一人ひとりが下界

まで下ろすことが一番よい方法だ。

そこで、試しに私は自分のモノを下界まで運び下ろしてみた。便秘気

味だったことで十七日間の登山中、大便是六回と極端に少なかったが、

そのうちハイキャンプ以上の二回分をビニール袋に入れ、ガチガチに凍

らせて持って下りた。重量も嵩もさしたるものではなく抵抗はなかった。

もしすべての回数分を運び下ろしたとしても二キロ弱と推量した。人それぞれの量だろうが、持って降りる

のも不可能ではないと感じた。

だが、ビニールに包まれた約千人もの登山者の排泄物が下界に収集で

きたとしても、つぎにどう処理するのか、これまた難題。いずれにしても

も養味増に扱える代物でないのは確かである。





## 短歌

## 鳥海山・夏

大橋克也

稲妻の切り裂く雲間絶え絶えに  
明日立ち向う山稜の見ゆ

滝の小屋の静寂に天の川を視る  
星の雫に目を癒さんと

荒々しき岩と砂礫の崖辿り

息子と立ちし鳥海の峰

恐竜の背とも見えし岩稜に

這いくる霧ぞ共に巻かれし

ほころびし息子のズック捨て難く

共に登りし汗洗い置く

## 海外の山

## 「ブラック・サマー」再び

江本嘉伸

第二の高峰、K2（八六一一メートル）でまたも悲劇が起きた。

この夏、K2には二つのスペイン隊、二つのアメリカ隊、オランダ隊、オーストラリア・ニュージーランド・スウェーデン合同隊の計六つのパーティーが入山していた。雪が多く、各隊とも苦労が続いていた。

八月十三日、このうちの六人がK2の頂上に迫っていた。

アメリカ人のロブ・スレイター、この五月エベレスト無酸素登頂をなしとげて話題となったイギリス女性のアリソン・ハーグリーブス、ニュージーランドのブルース・グラント、スペイン隊のロレンソ・オルティス、ハビエル・エスカルティン、ハビエル・オリバルの六人である。

十七日になって、六人全員が「登頂直後、雪崩に巻き込まれて遭難した」との衝撃的な一報がイスラマバードに伝えられた。

遭難前後の状況は、三日後スカルドに飛んだ英インディペンデント紙の記者に語った二人のスペイン隊員、

ロレンソ・オルタスとペペ・ガルセスの証言で明らかにされた。二人は八月十三日当日、「疲れ果てて」登頂を諦め、最終の第四キャンプに残っていたのだ。

「無線の交信によれば、六人は午後六時から七時にかけて登頂しようだ」と、二人は言う。「しかし、八時から十時にかけてものすごい風が吹いた」

テントが裂け、飛んでいってしまったため、二人は明け方まで雪の中にじっとしていたという。朝になって第三キャンプに向かって下山を始めたが、疲労困ぱいしていた。通常は八時間で行けるはずのキャンプまで下るのに五十時間かかった。

ハーグリーブスのものらしい紫の上着と靴、それにハーネスを下山の途中、発見した。頂上直下から飛ばされてきたものらしかった。第三キャンプから三百メートル離れた地点ではハーグリーブスではないかとみられる遺体を見たが、すでに暗くなっており、疲れきっていたので近くに

行って確認することはできなかった。他の登頂者も突風に飛ばされたか、倒れたと想像された。加えて、高山病のため六人に別れて下山したはずのカナダ人、ジェフ・レイクスも、

十四日、遺体で発見された。

K2の遭難といえば、八六年六月から八月にかけて各国の十三人が、次々に倒れた「ブラック・サマー（暗い夏）」が記憶に新しい。当時このコラムでも書いた（八六年九月号）K2の悲劇が、頂上から下降中に転落、あるいは風に閉じこめられ衰弱していった者が大半だった。

今回も、登頂後に起きた遭難という点では似ている。シェルパのサポートのないK2では酸素ボンベを使用しにくいことも一因だろう。

しかし、少なくともアリソン・ハーグリーブスの場合は、「無酸素」が条件だった。彼女は、可能ならば年内に第三の高峰、カンチェンジュンガにも登るつもりだった、と伝えられる。一年で世界最高の三つの頂きのすべてに無酸素登頂しようという野心を秘めていたわけだ。

「羊として千日を生きるよりは、虎として一日を生きたい」という言葉のアリソンは好きだった、とパートナーの山岳写真家、ジム・バラードは言う。しかし、残された幼い子ども、トムとケイトのことを思えば、そんなに急がずに、「勇敢な羊」として五百日を生きてよかったかもしれない、と思う。



# 会務報告

## 七月理事会

日時 七月十三日(木) 十八時三十分～  
二十一時四十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 村木会長、宮下、斎藤各副会長、大屋、吉永、中川、大谷、伊藤、水野、堀井、渡邊、溝口、山本、田邊、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉、大倉、村井、大森、神崎、重廣各常任評議員

## 【審議事項】

(一) 日本山岳会所蔵写真資料複写許可要請の件 大屋  
松本市立博物館主管特別展「日本アルプスと近代詩歌展」(七月十八日～八月二十日) 出展のため、小島島水、ウォルター・ウエストン、上條嘉門次三人の写真(大町博物館所蔵)の複写許可要請があった。 承認  
(二) 一六ミリ映画借用依頼の件 水野  
(株)アルパインツアースサービス社より「ネパール・ヒマラヤの夕べ」(九月二日～二十九日)を全国八都市で開催の

ため、本会所蔵の一六ミリ映画「マナスルに立つ」の借用依頼要請があった。(本会内規に照らし、相手方の了承のもとに、この条件を付けて) 承認

(三) 九十周年実行委員会委員追加について 大屋  
山口俊輔会員(N0四九七六)の九十周年実行委員六月八日理事会承認済みの組織名簿に記入漏れがあったので確認を願いたい。 承認

(四) 越後支部長の交代について 大屋  
七月八日支部総会において、佐藤一栄→五十嵐篤男(N0二七八五)会員が選任された。 承認

(五) 副会長の職務代行の順序について 大屋  
①宮下副会長 ②斎藤副会長 ③中村副会長の順序の確認を願う。 承認

(六) 夫婦会員の年会費について 大屋  
一方が終身会員の場合においての疑議が出されたが総会経過後であり、来年度より定款に基づき、本人通知の上で対処する。 承認

(七) 九十周年合同募金現況(七月十三日現在) 石橋  
会員募金 延べ千四百二十二名  
企業募金 九十九社(団体)  
二千三百五十九万円 承認

(八) マカール登山隊一九九五 大倉  
六月二十七日、西藏登山協会に五百十八万九千九百六十円を支払った。 承認

(九) HAT-Jより 神崎  
第四回国際交流青少年環境体験登山一九九五(二月)理事会で名義後援承認)を八月二十日～二十七日、長白山(白頭山)で実施するにあたり、日本から参加するお茶の水高校、富山県・泊高校、その他の出場高校教員に対し、本会からの派遣推薦状を要請する。 承認

【報告事項】  
(一) 定款変更(入会金等)に関しては、社団法人格などを検討の上文部省に要請する。 村木会長  
(二) 役員・委員会名簿記載の委員会委員の表示については、常任委員以外の特別、専門、支部、協力委員の表示は(特)(専)(支)(協)などの頭文字表示とする。 中川

(三) 七年度より常任理事会と理事会を分け、第二水曜・木曜として十分審議ができるようになった。 大屋

(四) 本会入会に際して、一部に安易に過ぎるとの意見が出されたが、本年度総会承認の組織見直し(新会員は二年経過後に紹介可能とするなど)の趣旨を踏襲して、本会員としての品位の維持昂揚に努める。 中川

(五) 通産大臣宛の「プラスチック製登山靴の突然破壊に関する安全基準設定について」の山岳四団体の要望書」について日山協、労山、ヒマラヤ協会から

申し入れがあった。(会としては都岳連、新PL法などを考慮して要望の必要なしと判断する)

(六) 「日本レスキュー協議会規約(案)」が日本勤労者山岳連盟より提案された。 宇田川

(七) 日本山岳会内規項目通りこれまでに数多くの規定、内規が存在する。それらを例規集として原文通りで取りまとめる。 吉永

(八) 職員期末手当は七月十二日本会規定通り支給した。 吉永

(九) 名誉会員を開む会を八月二十三日当ルームで開催する。 大屋

味の技、心でつくる



おさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)  
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

おさし坊 日比谷店 (東宝ツインタワービル9F)  
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905  
おさし坊 麹町店 (有楽町線麹町駅)  
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313  
おさし坊 神田西口店 (神田西口通り商店街)  
千代田区神田2-9-9 ☎03-3252-5015  
おさし坊 友誼ゆづぜん (半蔵門線半蔵門駅3分)  
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

(注) 「山岳」第九〇年は編集計画通り  
進行する。 田邊

(出) マカルー峰登山隊一九九五 村井  
①六月三十日、池袋のメトロポリタン  
・ホテルにおいて、登頂祝賀会が盛会  
裡に行われた。

②登山隊事務局は七月二十三日に荷物  
の一部を二〇四号室に移し、七月三十  
日に閉鎖、読売新聞社へ返還する。

(出) 九十周年記念事業に関して  
①記念晩餐会の会長特別表彰について

村木会長

登山活動、山に関する文化的活動に  
対して貢献度の高い人の推薦を願う。

②フォーラムについて 大森

十月十四日(土)十時三十分～十七時、  
新高輪プリンス・パミール館で開催。

●自然環境をテーマにヨセミテ公園  
(米)・メドレー会長をゲストに。

●中高年登山をテーマにメインキャス  
ト斎藤副会長で。

●海外登山十回の隊員を迎えて、日本  
山岳会この十年の歩み。

などを円卓座談会方式等で実施予定。  
\*慶雲の間では壁面に本会所蔵の絵画

の一部を展示、各委員会の説明、ネル  
の展示など。

③式典とフォーラムの広報 中川

「山」八月号、九月号に掲載。会員案  
内状は九月中旬に発送予定。

④九十周年記念式典、各委員会の予算

について

吉永

八月中旬までに予算書の提出を要望  
する。地方ブロック式典に対する助成  
金支出Ⅱ九州ブロックは支出済み、京  
都・岐阜ブロックⅡ七月、中部プロッ  
クⅡ八月、東北ブロックⅡ九月、支出  
予定。

⑤創立九十周年記念事業委員会 大屋  
式典、各行事、事業委員会の予定が  
出そろったところで、中間統括の意味

合いを含めて、九十周年記念事業委員  
会を開催する。

(出) 青年部ムスターグ・アタ山群登山  
隊について 宇田川

日本山岳会青年部「日本木斯塔格阿  
塔山群登山隊一九九五」(六月理事会  
承認)は七月二十一日～八月二十七日

まで三十八日間の予定で出発するにあ  
たり「二十代の隊員を中心として、総

隊長・川上隆、登山隊長・絹川祥夫以  
下八名で、次代を担うにふさわしい若

手育成を期し、元気にいってまいりま  
す」と絹川隊長より挨拶があった。

(出) 山研より 溝口

七月～十月の宿泊申込書による予定  
に空きが多い。会員の積極的な利用を  
願いたい。

(出) 図書室について 水野

部屋の一部漏水のため今週は休室と  
する。部屋の利用については規定を遵  
守して、図書室における会議、作業な

どは会員としての品位を保ち、一切差  
し控えてほしい。

(出) ルーム夏季休館について 大屋  
八月十四日(月)～十九日(土) 夏休みの  
ため閉室。

### 【委員会報告】

●科学研究委員会 ①スキー力学講演  
会Ⅰスキーロボット実験によるシミュ  
レーションが七月七日十九日より二  
時間にわたりルームで開催された。出  
席者三十六名。詳細は後日会報に掲載。

②平成七年度の科学委員会の構成は、  
(1)当委員会の具体的な組織見直しは七  
月委員会より開始、本年内を目途に結  
論を出し、実施に移す。(2)平成七年度

の委員構成は若干の変更にとどめ、根  
本的、かつ大幅な変更は、委員の意見  
をよく徴し、一年以内を目途に実施す  
る。以上にもとづいて今回の委員構成

案を作り、提出している。

●集委員会 若葉会山行の写真交換  
会を六月二十七日、ルームで行った。

きのこ山行(九月三十日～十月一日)  
は奥会津・博士山で実施。高郷村・高

郷温泉に宿泊。飯豊連峰・鏡山登山、  
越後支部後援。自転車ツーリングパー  
ティーの予定あり。記念晩餐会翌日の

山行(十月十五日)は丹沢・三の塔で  
十一時三十分～十三時まで。現地集合、  
現地解散。ビールパーティー(九月二  
日)十七時～ルームにて。二火会と共催。

## ルーム日誌

|     |                |                  |
|-----|----------------|------------------|
| 7月  | 総務委員会          | フォーラム委員会         |
| 3日  | 資料委員会          |                  |
| 4日  | 九十周年映像委員会      | アルパイ<br>ンスケッチクラブ |
| 5日  | 青年部            | 山の自然学研究会         |
| 6日  | 集委員会           | 学生部              |
| 7日  | 科学委員会          | フォーラム委員会         |
| 8日  | アルパインフォトビデオクラブ |                  |
| 10日 | 図書委員会          | アルパインスキ<br>ークラブ  |
| 11日 | 九十周年映像委員会      | アルパイ<br>ンスケッチクラブ |
| 12日 | 常務理事会          | 93同期会            |
| 13日 | 理事会            | 学生部              |
| 14日 | アルパインフォトビデオクラブ |                  |
| 17日 | 総務委員会          | 資料委員会            |
| 18日 | 九十周年映像委員会      | フィルム<br>ビデオ委員会   |
| 19日 | 評議員会           | 三水会              |
| 20日 | 青年部            |                  |
| 25日 | 科学委員会          | 自然保護委員会          |
| 26日 | 遭難対策委員会        |                  |
| 27日 | 集委員会           |                  |
| 31日 | 資料委員会          | データバンク委員<br>会    |

7月来室者748名

# INFORMATION



## ◆日本山岳会九十周年記念フォーラム

日本山岳会記念フォーラム委員会  
左記の要領で記念フォーラムを開催  
します。ぜひご参加ください。

日時 十月十四日(出) 十時～十六時三  
十分(九時四十分受付開始)

会場 東京・新高輪プリンスホテル

「白雲」「慶雲」の二会場

テーマ「日本山岳会は百周年に向けて  
何をなすべきか」

内容「三部会形式」

①映像とパネルディスカッション

「ヒマラヤ登山その回顧と展望」

「マナスル初登頂からマカルー東稜  
まで」 座長・池田常重氏

十三時三十分～十六時三十分「白雲」

②パネルディスカッションと座談

「ヨセミテからのメッセージ」

「山の自然保護について」

アメリカ・ヨセミテ協会 スティー  
ブン・P・メドレー会長 岡島成行

小野有五 沼田真他

十時三十分～十五時「白雲」、午後  
は「慶雲」へ移動

## ③シンポジウム

「秋の山行―中高年登山者の楽しみ―」

十時三十分～十二時三十分「慶雲」

\*内容、出演者は変更する場合があります。  
ます。ご了承ください。

## ●展示

・山岳絵画展Ⅱ日本山岳会所蔵絵画か  
ら秀品を展示

・展示会Ⅱ写真パネルなどで日本山岳  
会の各委員会、同好会の活動報告

## ◆九十周年記念式典・北陸ブロック

石川・富山・福井支部

一、式典、記念講演、記念パティー

日時 十月二十一日(出)

会場 金沢シティーモントホテル

住所・金沢市橋場町二一〇

TEL〇七六二二四一五五五

受付 十五時開始

式典および記念講演 十六時～十八時

講師 重廣恒夫氏

記念パティー 十八時三十分～二十

時三十分

会費 一万円

ホテル宿泊 八千五百円(朝食込み)

二、記念山行

日時 十月二十二日(日)

場所 医王山(いおうせん)

医王の里キャンプ場九時発  
西尾平～観平～大沼～高岩～白

元山～下山解散十五時

会費 無料

申込・連絡先

〒九二〇 金沢市桜町一〇一四

中川博人内 日本山岳会石川支

部事務局

TEL・FAX〇七六二二六二一五六一

## ◆一九九五年度自然保護全国集会

本年度の全国集会是東京で開催します。

日時 十月十五日(日) 九時三十分～十

五時

会場 山岳会ルーム

テーマ「日本山岳会の自然保護を考

える」

①鳥海山の自然保護

②各支部の現況

申込 支部名、会員番号を記入の上、

左記宛はがきで九月三十日まで

にお申し込みください。

〒二七三〇一 千葉県鎌ケ谷市

東初富六一〇一九 篠崎 仁

## ◆第三回「山を語る」講演会

図書委員会

皆さま、ぜひご参加ください。

日時 十月二十六日(木) 十八時三十分

場所 日本山岳会集会所

講師 塩沢久仙氏(芦安村村宮広河原

山荘)

## ◆ジャック93会だより

・会報「休山悠遊」二号発行。希望者

は長形三号封筒五枚に九十円切手を

貼り、住所・氏名を記入し、93会宛

・月例会 九月から第二水曜日に行い

ます。日本山岳会ルームで十八時三

十分～二十時。二次会Ⅱ二十時三十

分～二十二時、中華「汁番新館」

◆水彩と色鉛筆による旅のスケッチ

岩切峯泰個展

スイス・ネパールなどの山々と風物、

旅のスケッチ約四十点を展示します。

日時 十月十六日(月)～二十一日(出)

十時～十八時(最終日は十七時

三十分終了)

場所 草土舎十階アートサロン

千代田区神田小川町一七

TEL〇三三三九四六四一一

(千代田線新小川の駅下車)

都営新宿線小川町駅下車)

■訂正 八月号一〇ページ一段目杉岡

繁は松岡繁の誤りでした。お詫びして

訂正します。

日本山岳会会報 山 604 号

1995年(平成7年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敬

印刷 株式会社 双陽社